

Support for Woman Doctors ～私からあなたへ～

濱口 恭子 先生【京都府 29期】



はじめまして、京都29期の濱口恭子と申します。皆様はどのような卒後をお過ごしでしょうか？

ほぼ全寮制で密に過ごした仲間とも、卒後はまさに巢立ちのようにばらばらとなり、いきなり野に放たれたようでしたよね。不安な時も、急に相談したい時も、気兼ねなく話せる同世代の仲間はずっと不在。患者の治療方針や、人生の選択まで、私も寂しく決断してきました。

さて、私は義務年限を終えると同時に、夫の留学に帯同するという機会を得ました。今ではかけがえのない時間であったと思えますが、当時は全くそう思えず、憂鬱でした。義務年限を終えてやっと自分のやりたいことがやれる！と楽しみにしていた頃でしたし、年齢的には何をやるにしても最後の挑戦かもしれない、と小さな子どもを抱えての選択にはとても大きな努力を要した頃でした。結局周りのすすめもあって帯同することを選び、専業主婦に徹することに決めましたが、やはり適応するのに時間がかかりました。金銭的には不安が大きく、言葉の壁や、仕事を辞めてきた喪失感も重くのしかかりました。

できるだけ生活費を抑えようと、食材を揃えに、前に子どもを抱え、後ろにリュックを背負ってチャイナタウンに通いました。とてもみずぼらしい親子に見られていたでしょうね。そんな憂鬱な日々の中のある日、雑居ビルの屋上近くに落書きを見つけました。“everything energy”と書いてありました。スプレーかペンキで書いてあるようで、どこかのヤンキーが書いたものか、あるいは画家のバスキアのアトリエ近くでしたので、彼の憂鬱な日々の中の一つやきだったのかもしれませんが。衝撃的な出会いでした。

義務年限の初めの5年は意気揚々と、残りは出産や育児など華やかな経験もありましたが、医師としてはまだまだ

花開かない日々悶々とし、一線に返り咲けなかった自分。異国で適応できない自分。完全に自信を失っていた時でした。でもそこには、肌の色も宗教も生活様式も異なる人たちが皆エネルギッシュに生きていました。英語圏で堂々と生きている中国人、南米人、インド人。ダウントウンを老婆のタクシードライバーが走り抜け、公園では白人と黒人がチェスを楽しんでいました。老若男女、みんなが生き生きしていました。

最近では、他大学も地域卒の研修制度を作るなどして、自治医大生の卒後ルートが浮かないようになってきたようですが、それでも『王道』とは言い難いルートに悩んでいる方も多いでしょう。義務年限が終わったころには体力的にも一念発起が億劫となり、特に子どもを抱えては飛び出せないでいる方もいるかもしれません。でも、きっと回り道の経験はあなたの『彩』になると思います。偏屈にならないでください。年齢も関係ありません。周りと均一である必要は全くありません。私もようやく気が付きました。

私は帰国後に新たなことに挑戦しはじめています。昔は、できるだけ万人受けする王道を行きたいと思っていた方ですが、今はアラフォーにしてマイウェイを進んでいます。皆さんにも恩師がおられるのではないのでしょうか？恩師が私に言ってくれました。

『こうなりたい、と思うことが大切だと聞きます。夢見るだけではだめかもしれないけど、夢見ることさえしなければ、変わらない。自分の未来は明るい、そう思って生きていく方が、楽しいのではないのでしょうか。楽観主義的努力家でいてください。』

日々のすべてを糧にして、頑張っていきたいと思います。どうぞ皆様も。

後輩医師・学生へ一言メッセージ

『もうひとつ、私の恩師から。』

清水の舞台から飛び降りてみるのも時には必要でしょう。ただし、お怪我をしないように。それから、落ちてまた階段を上ってくるように。』

「自治医大卒業生 女性医師支援 NEWS」では、読者の皆様からのご意見をお待ちいたしております。特集記事のテーマ、絵本やその他のコーナーについても、ご希望などあれば、是非お寄せください。
連絡先：自治医科大学 地域医療推進課 卒後指導係
E-mail : chisui@jichi.ac.jp